

みんなで楽しもう！ニユースポーツ

来年は「三重とこわか国体」(第76回国民体育大会)「三重とこわか大会」(第21回全国障害者スポーツ大会)が開催される予定です。また、「東京オリンピック」の開催も予定され、ひたむきにスポーツに打ち込む選手たちの姿や、絆の強さに感動する日々が続くことでしょう。

そうした中、新たなスポーツも誕生し、県内でも広がりを見せています。いつでもどこでも、誰にでも気軽に参加できるようにと考えられたニユースポーツは、男女を問わず、どの年代からでも始めることができ、生涯を通じて楽しめるのが魅力となっています。

この春からは、夫婦・親子、そして友人たちと、新しく楽しいニユースポーツに挑戦してみたいかがでしょう。

*三重県内には、ほかにニユースポーツを楽しめる場所や大会があり、協会なども存在しています。ここで紹介するのは、ごく一部です。

*各ニユースポーツの練習や大会などの開催日時・場所・受け入れ方法・人数・料金などは、それぞれに異なり、変更する場合もあります。必ず、事前にご確認ください。

取材・文…中村真由美・中村元美
撮影…梅川紀彦・尾之内孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



南フランス発祥、約55の国々で親しまれる

ペタンク

【事務局 津市】



「ペタンクフレンドシップ伊勢大会」

タンクフレンドシップ伊勢大会」の真つ最中。あちこちから仲間への声援が聞こえてきます。しばらく見学していると、2人1組になって、公式野球ほどの大きさのボールを、赤や黄色の目標球に向かって投げ合い、その距離の近さを競い合っているのがわかります。

「あの小さな目標球は木製で、ビュットといえます。投げているボールは金属製で、直径は7.05、8センチメートル、重さは650、800グラムと決められています。今日は2人对2人のダブルスですが、シングルスやトリプルスで行う場合もあります」と教えてくれるのは「三重県ペタンク協会」(山下 正義

「オッすごい」「惜しい、惜しい…」小春日和のある日、伊勢市楠部町の「倉田山公園野球場」(ダイヤモンドスタジアム伊勢)のサブグラウンドを訪ねると、「ペ

されています。

「ペタンクは、土の地面であれば、いつでも、どこでも、誰でもできます。ただ、簡単そうに見えて実は、体の動き、手の使い方、スピンのかけ方に技が必要です。だから、思いどおりに投球できたときは最高です。しかも、子どもや80代の方でも、成人男性に勝てるのも特徴といえます」と平松さん。この日の参加者の中で最高齢者、85歳の伊藤伊代さんに話を伺うと、「今まで体験したことがないことをしたくて始めましたが、思った以上に奥が深いです



ペタンクのボールと赤色のビュット



ペタンクの投球風景



ボールとビュットの距離をメジャーで正確に測る。



「ペタンクフレンドシップ伊勢大会」参加者

ね。まだまだ練習しなくちゃ」とのこと。その明るい笑顔が、ペタンクの魅力を雄弁に物語っていました。

お問い合わせ

三重県ペタンク協会事務局
TEL 090-11479-5365

(平松 宏之さん)

理事長)事務局の平松 宏之さん。レクリエーション・コーディネーターとしても活動する平松さんにボールを持たせてもらおうと、ずっしりとした重みを感じました。ペタンクでは、手のひらを下にして持って投げるのだと教わります。こうすると、バックスピがかかって、めざす場所に止めやすくなるのだといいます。

ペタンクの起源は意外と古く、明治43(1910)年に遡ります。いつでも少しのスペースで、しかも少数人数でもできることから、現在、約55か国で親しまれています。特に発祥国フランスでは、競技人口が500万人を超え、公園や広場でプレーに興じる人々の姿が見られるといえます。

そんなペタンクが日本に入ってきたのは、昭和40年代の初めごろ。同45(1



平松 宏之さん

タスポニー

【事務局 四日市市】



『四日市市立中央小学校』体育館での練習風景(毎週水曜日予定)



タスポニーのボール

「もともとリハビリ用だったので、ぶつかっても痛くないし、軽いでしょう?」と、黄色いボールを渡してくれるのは「三重県タスポニー協会」(馬場 宏会長)の事務局次長を務める浅田 勉久さん。直径は約17センチメートル、重さ約50グラムで、スポンジ製のために感触もよく、一見すると遊具のようです。



浅田 勉久さん

「タスポニーはテニスに似ていますが、ラケットを使わず素手で打ち合うため、簡単に習得できるのが魅力です」と浅田さん。コートの広さはテニスコートの4分の1程度、中央に張るネットの高さもテニスよりも約30センチメートル低いため、女性や小学生でもラリーが続く、テニ

スの醍醐味を味わうことが可能。強く打ち込めば、バレーボールのアタックが決まった時のような爽快感も味わえるといいます。しかも、ボールがあまりバウンドしないため、腰を落とした体勢で打ち返すことなどから、適度な運動にもなるといいます。

現在、県内では協会や四日市市主催をあわせて、年に7回程度の大会が開催されています。来る、5月10日(日)には「三重県タスポニー大会」が「四日市市霞ヶ浦体育館」で開催予定。一度、見学してみたいかがでしょうか。



「中央タスポニークラブ」の皆さん

お問い合わせ

三重県タスポニー協会事務局
TEL 090-3454-5744

(浅田 勉久さん)

気軽にゴルフの醍醐味を味わえる

ターゲット・バードゴルフ

【事務局 名張市】



直径約1メートルのネットの器具を狙ってスイング



羽根付きボールはカラフル

れを考えて打たないといけないので面白いんですよ」と三重県ターゲット・バードゴルフ協会「(川合 滋会長)の副会長を務める森本 定利さん。

「ナイスパー」ホールインワン、狙えるよ」と、芝生の上での掛け声は、まさにゴルフと一緒にです。技術面やマナーもほぼ同じですが、「ターゲット・バードゴルフ」がゴルフと大きく違うのは、ボールと狙うホールです。羽根の付いたボールを使い、パラソルを逆さにしたような器具がホールとなり、コースを回ってスコアを競います。「羽根が風の影響を受けやすく、逆にそ



「名張市ターゲット・バードゴルフ協会」の会長も務める森本 定利さん

平成13(2001)年の「全国スポーツ・レクリエーション祭」で大会を開催したこともあり、名張市には常設のコースがあるので天気次第で毎日利用する人もいます。必要な道具はボールとクラブ、それにスイングマットの3点。クラブは長距離も短距離も1本で打ち分けなければなりません。「力加減ではなく、クラブの長さや振り幅で調整します。ホールに近づけば近づくほど難しくなり、クラブを開く角度で工夫します。距離感をつかもつと、みんな熱心に研究されていますね」と森本さん。

取材の日の「ハンディキャップ大会」には、55歳〜89歳までが参加。「ホールに入った時の爽快感は格別です。18ホールまわれば4,5000歩になりますから健康にもいいですね」と話す参加者の姿勢のよさも際立ちました。美しいスイングのフォームは、基本を忠実に守って練習を重ねているからこそ。

休憩中は、スマホの扱いや野菜づくり、医事相談やDIYといった話に花が咲きます。ゴルフは紳士淑女のスポーツ。自身のスコアの向上をめざしながらも、ルールとエチケットを守り、コースを回るうちに仲間との絆を深めています。



「ハンディキャップ大会」に参った皆さん

お問い合わせ

三重県ターゲット・バードゴルフ協会事務局
TEL 0595-63-5339

(名張市総合体育館内)

緻密な作戦が勝利のための重要なポイント

ユニカール

【事務局 亀山市】



相手チームのストーンを弾き出して狙いの場所に

スウェーデン発祥の「ユニカール」は、「ユニバーサル・カーリング」の略。カーリングは平成4（1992）年の冬季オリンピックから種目に採用されている水上スポーツですが、そのルールを簡略化し、もっと手軽にできる陸上版として考案されたのがユニカールです。水の代わりにカーペットを敷き、その上にストーンを投げ滑らせ、センターサークルに近付けることで得点を競います。ストーンの重さは3キロあります。

ですが、腕力ではなく遠心力を利用するので、コツさえつかめば誰でも簡単に投げるすることができます。体力を気にすることなく楽しめるスポーツとして県内各地で盛んに行われています。

単に投げるだけ

でなく、相手のストーンを弾きとばしたり、自分たちのチームのストーンを助けたりしてゲームが進み、ボウリングのような正確なコントロールとビリヤード的なクッションを応用する技が要求されます。「カーリングの競技試合は2時間半ほどかかりますが、ユニカールは15分程度。短時間で勝敗がつくテンポのよさも人気の理由でしょう」と

「三重県ユニカール協会」理事長の小林茂さん。協会は平成9（1997）年に

設立されましたが、小林さんは日本にユニカールを紹介した大久保博さんから声を掛けられ、生涯スポーツとして愛好者が増えればと設立当初から関わってきました。普及指導員講習会を実施したり、クラブづくりや地域大会を支援し、平成12（2000）年から開催する「パールカップ大会」では三重に全国のプレーヤーを迎え入れています。



小林 茂さん



毎年盛り上がる「パールカップ大会」※

曜の夜。亀山市西小学校の体育館に15人前後集まっています。「出しにきたなあ」「微妙なところで止まったなあ」「開きすぎてしまった」と、一投ごとにぎやかな声飛び交います。相手チームのストーンを外に弾き出し、狙った位置で止まると、投げた本人が喜ぶのはもちろん、相手チームからも称賛の拍手が送られます。カーリング同様、チームで作戦をよく話し合うことが勝利の秘訣。1投目、2投目と進むにつれて、次にどの位置に投げるか、綿密な戦術を練らなければなりません。

ご好意に甘え、練習に参加させてもらいました。最初は滑らせ過ぎたり、届か



ストーンを3回、交代に投げる

なかったりしましたが、「ボウリングのような感覚で」と教えてもらい、徐々に狙った場所に近付けられるようになってきました。それでも、どこへ投げればチームが有利となるかは初心者では見当もつきません。その都度ベランの方にアドバイスを聞くうちに、チームメンバーとしての責任感も芽生えてきます。仲間の一体感が強まる姿も、ユニカールの大きな魅力なのでしょう。「全身を動かすので結構な運動量になっていますよ。体力だけでなく頭も使いますしね。それに小学生対大学生のように年齢差があっても、利き手じゃない方で投げたり、投げる位置を前後



バランスを崩さず遠心力を利用



練習に参加する「ヘイサンユニカ」の皆さん

させたり、ハンディをつけて楽しむことができます」と、参加者の一人。ルールを柔軟に変え、多くの人で競技を共有する考え方は、ユニバーサルの理念と同じ。世代や性別に関わらず、皆が夢中になれるニュースポーツです。

お問い合わせ

三重県ユニカール協会事務局
TEL 0595-8215285

（小林 茂さん）

※印の写真は取材先から提供していただきました

みんなでワンチームになって、助け合う

キンボールスポーツ

【事務局 伊賀市】



サーブ練習をする笠谷 幸さん(向って左側)と皆さん

本年1月7日の夕刻、伊賀市ゆめが丘にある「三重県立ゆめドームうえの」を訪ねると、目に飛び込んできたのは、

て頑丈なのがわかります。持ち歩こうとしても重心が定まらず、コントロールするのに時間を要しました。

「カナダで考案されたキンボールスポーツは、平成9(1997)年に考案者が来日して紹介したことから、普及が進みました。県内でも、同年の10月に連盟が設立され、現在、志摩市・鈴鹿市・伊賀市を中心に約100名の会員がいます」と教えてくれるのは、事務局の池澤 克将さんです。また、理事で広報担当の笠谷 幸さんに話を伺うと、キンボールスポーツには、バレーボールやラグビー、サッカーなど、さまざまな競技の要素が含まれますが、最大のポイントは、1チーム4名の3チームが同時に競技すること。しかも3チームが公平に得点を重ねられるように、1チームが失敗すると、相手2チームに加点されるなど、ルールが複雑になっています。

「この楽しさは体験してみないとわかりにくいので、とりあえずブラックとグレーの2チームで対戦してみよう」と誘われて、サーブから体験すること。コートの中で、チームメイト

3人が中腰になって支えるボールを両手で強く打つのですが、この時に必ず行うことは、「オムニキン、グレー(レシーブチームの色)とコールすること。すると、コート内で待ち構えていたグレーチームの一人がレシーブ。その後、ボールを持って走ったり、チームメイトにパスをしますが、3人目が触れたとたんに、その場所からサーブを開始。今度はグレーチームの一人が「オムニキン、ブラック」とコールしてプレーが再開します。この展開の速さは想像以上で、コート中を走り続けるとかなりの運

動量になりそうです。また、チーム内での助け合い・意思疎通はもちろんのこと、相手チームとの駆け引きなどを瞬時に判断しなければいけないため、集中力・判断力も必要だと痛感しました。この日の練習参加者は、上記3人に加えて、山口 浩司さん、濱島 良子さん、田中 凌夢さん、そして小学生の寺岡 龍音さんなど。皆さんに始めたきっかけを尋ねると「新しいことに挑戦してみたい」と思っていて「体験してみたら楽しくて…」という共通の言葉が返ってきました。その中で田中さんは、日本代

表に2年連続で選抜された逸材。サッカーのスライディングのような迫力満点のレシーブを見せてくれました。最後に「オムニキン」とは、すべての人が楽しめるスポーツという意味の造語だと教わり、納得しました。

お問い合わせ

三重県キンボールスポーツ連盟事務局
TEL 090-8735-2166

(池澤 克将さん)



キンボールのカバー(向かって左側)とインナーボール



足を使つてのレシーブ練習をする田中 凌夢さん



「第20回三重キンボールスポーツ交流大会」の様子※



毎月第1・3火曜日に「三重県立ゆめドームうえの」で練習する皆さん

森林や林業に興味を持つきっかけに

クツブ

【取材地 尾鷲市】



木と木がぶつかり生じる心地よい音

自然をフィールドに、コートのラインさえ引けば楽しめるクツブは、使用する道具がすべて木製です。クツブはスウェーデン語で「薪」を意味し、家の軒下にあった薪を使って遊んだのが起源でないかといわれています。600

年以上の伝統があり、スウェーデンのゴットランド島では、毎年世界選手権が開かれるほど、広く受け入れられている競技スポーツです。

「集中力がいらすし、対戦相手が見ている前で投げるのでプレッシャーもあり、メンタルも強くなりますよ」と三重県クツブ協会（吉田 正木会長）の事務局として普及に努める樋口大輔さん。コートにセンターラインを引き、2チームが向かい合って試合をします。

角材をベースクツブとして並べ、コートの真ん中には一番大きなキングが置かれます。相手のコートのクツブをめがけて、丸棒のカストピンナを6投ずつ交代で投げていきます。自分のコートのクツブが倒されたら、次のターンでそのクツブを相手コートに投げ入れてから攻撃。投げ入れたクツブは、フィールドクツブと

呼ばれ、新たな的となり、ベースクツブより先に倒さなければなりません。また、フィールドクツブを倒せなかった場合は、相手がセンターラインに一番近いクツブの位置まで前に出て攻撃をすることができるようになるため、展開がぐっとおもしろくなり、緊張感も生まれます。相手コートにあるクツブをすべて倒せば、中央のキングに挑戦。先にキングを倒せば勝ちとなりますが、クツブ全てを倒す前に誤ってキングを倒してしまうと、その時点で負け。戦術や駆け引きもポイントとなり、ゲーム性の高いスポーツです。

「ルールはわかりやすく、チェスのようだという人もいます。対戦相手さえいれば2人でもできますし、6投を順に回せばいいので何人でもできます。コートのお大きさもローカルルールを設



道具はヒノキのいい香り

けて、子どもたちの成長に合わせた楽しみ方ができます」と尾鷲市クツブ協会「の松永 理寛会長。林業盛んなまちでクツブの普及に取り組もうと、尾鷲市では尾鷲ヒノキで用具を90セット製作し、市内の小学校やコミュニティセンターなどに配布しました。イベントでクツブ体験を行っているほか、三重県や「三重県クツブ協会」と連携して、クツブ普及指導員の養成講座や誰でも参加できるオープン大会を行っています。クツブのルールで特徴的なのがハイタッチです。クツブを倒した時の決ま

りになっているのですが、ルールでなくとも無意識に仲間とハイタッチで盛り上がりがあります。見事的な当てには、相手チームからも感嘆の声が上がります。またカストピンナがクツブに命中すると、その音とともに爽快感を味わえ、心地よい響きはストレス解消にもなるようです。投球力がなくても、振りの力を使うことで遠くに飛ばせるようになります。大人も子どもも一緒に楽しく楽しめます。また高齢者にはゲートボールに替わる娯楽としても人気。クツブを投げたり、拾ったりの繰り返しで筋力



「尾鷲クツブオープン2019」の様子※



ハンデをつけて、投げる位置は前方で



ナイスショットに思わずハイタッチ



「三重県クツブ協会」樋口 大輔さん(右端)、
「尾鷲市クツブ協会」松永 理寛さん(右から4番目)と
「熊野古道センター」での練習に家族や知人と訪れた皆さん

お問い合わせ

三重県クツブ協会

Mail : miekubb@gmail.com

もついていたという声も聞こえます。

スポーツ振興だけでなく林業振興にもつながるよう、クツブから多くの人が森林や林業にも関心を持つてくれたらと期待されています。平坦な場所さえあればできるエコロジカルなスポーツが、森林教育にもつながっています。